

# 日本在住留学生の異文化適応に関する PAC 分析を用いた質的研究

石鍋 浩\*・安 龍洙\*\*

(2020 年 11 月 9 日受理)

## Attitude Constructions of Cross-cultural Adaptations in the International Students in Japan

Hiroshi ISHINABE\* and Young Su AN\*\*

(Received November 9, 2020)

### 要旨

文化背景の異なる土地で学ぶ留学生が円滑に異文化適応できるかどうかは、彼らの留学生活の成否に直結する。異文化適応の影響要因はこれまで定量的な調査を中心に行われてきているが、そのために留学生が個別に抱える問題が見えにくくなっている可能性もある。本研究では、留学生が生活面や人間関係面などにおいて抱える困難点にどのような構造が認められるか PAC 分析を用いて質的に検討した。結果、先行研究の異文化適応の影響要因を示唆するクラスターの形成が確認された。その一方、個々の留学生が抱える異文化適応に関する問題に対し、先行研究の枠組みではカバーしきれない個別の問題を可視化できることが示された。個別の事例から、より細かいケアの必要性が示唆された。今後、多様化することが予想される留学生を支援していくための資料となりうると考えられる。

【キーワード】 留学生、異文化適応、PAC 分析

### 1. 背景と目的

在日留学生の異文化適応研究は多岐に渡り、様々な尺度が開発され異文化適応に影響を与える要因の検討が行われている(田中 1992、江村 1993、田中 1998、田中 2010、宮城 2011、譚ら 2011、平田 2014)。異文化適応の影響要因を検討した研究についてのレビュー論文において、心身の健康などの心理的側面、学習・研究、日本文化など社会文化的側面、対人関係領域、居住・経済領

---

\*東大阪大学短期大学部介護福祉学科 (〒 577-0044 大阪府東大阪市西堤学園町 3-1-1; Department of Social Care, Higashiosaka Junior College, 577-0044 Nishizutsumi-gakuencho 3-1-1 Higashiosaka-shi Osaka Japan)

\*\*茨城大学全学教育機構 (310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi Japan)

域などの適応指標が用いられていることが示されている（宮城 2011、譚ら 2011）。在日留学生が抱える、日本人との対人行動上の困難点として、(1) 間接性：はっきり断らない、遠慮の意図がつかみにくい、(2) 集団行動：要領がつかめず必然性がわからない、(3) 社会通念：社交辞令を誤解していた、(4) 感情表現：開放的な表現を好む文化圏の留学生にとって感情表現の抑制は窮屈に感じる、(5) 異性・同性との対応：性規範が異なる文化圏からの留学生を困惑させる、(6) 外国人扱い：英語ばかりで話しかけられたり、定番の質問を繰り返されたりする、の6つが示されている（田中 2010）。これまでの異文化適応に関する検討は定量的なものが中心（田中 1992、江村 1993、田中 1998、田中 2010、宮城 2011、譚ら 2011、平田 2014）であったが、留学生が日本という異文化に適応し所期の目的を達成するため質的な検討も行っていく必要がある。

文化背景の異なる土地で学ぶ留学生の異文化適応過程には対人葛藤も伴うと考えられる。対人葛藤は、相手が自分と両立できない目標・価値観・目的などをもっていることを問題として認知し否定的な感情反応を経験するなか、その問題を解決するための行動プロセスである（兪 2016）。対人葛藤は多様な面に注目する必要があるが、認知的側面が対人葛藤プロセスに影響を与えることが指摘されている（兪 2016）。葛藤エピソードは、Aftermath of Preceding Conflict Episode（先行葛藤エピソードの余波）、Latent Conflict（潜在的葛藤）、Felt Conflict（知覚された葛藤）、Perceived Conflict（感じられた葛藤）、Manifest Conflict（明確化された葛藤）、Conflict Aftermath（葛藤の余波）などが示され構造化されており（Pondy 1967、兪 2016）、留学生の異文化適応を検討する際の新たな視点を与えるアプローチであると考えられる。

外国人の対日観についての質的な研究においては、出身地により異なる対日観と共通する対日観があることや、滞在歴が長い外国人は肯定的な対日観を有しているのに対し、滞在歴が短い外国人は肯定イメージと否定イメージが複雑に絡んでいることなどが示されている（安 2009、安 2010a、安 2010b、安 2011、安・池田 2012、安 2012）が、異文化適応に伴う、留学生が抱える問題点について質的に検討した事例は少ない。今後は、在日留学生などが日本においてどのような対人葛藤を抱えているか質的に検討していく必要がある。特に、心身の健康、学習・研究面、対人関係について個々がどのような問題を抱えているかを知ることは、外国人の日本留学を成功に導くための重要な手掛かりの一つとなりうると考えられる。しかし、先行研究に見られるように、これまでは定量的研究が中心であったため、留学生が個別に抱える異文化適応に与える影響要因が見えにくくなっている可能性もある。そこで本研究では、留学生を対象に、彼らが日本において生活面や人間関係面などにおいてどのような困難を抱えているか、またその困難点にはどのような構造が認められるか PAC 分析を用いて質的に検討することを研究の目的とした。

## 2. 方法

日本の大学、大学院で学習・研究する留学生 5 名を対象（対象 A から対象 E）に、PAC 分析を実施した（実施時期：2020 年 2 月、対象の日本滞在歴は 2 年から 3 年）。PAC 分析は多変量解析を取り入れ、少数事例に関する詳細で客観的な分析が可能である（内藤 1997）。連想刺激の操作的手続きにより、対象の内面へのアプローチや、対象自身の問題について気づきをもたらすことなども可能であることが示されている（内藤 1997）。

本研究への協力に当たり、研究の目的、研究協力の任意性、匿名化によるプライバシーの保護、協力同意撤回の自由について文書および口頭で説明し同意を得た。対象が特定されることを回避するため、出身地域、性別、年齢等が推測されうる箇所は削除、あるいは記号とした。

研究は第1部の質問紙調査と第2部の口頭調査から構成した。第1部の質問紙調査では、以下の刺激を与え、イメージ項目を質問紙に記入するよう教示した。イメージ項目記入は10個以上になるよう教示した。

【刺激文】あなたが日本で生活するうえで困った（困っている）ことや人間関係で悩んだ（悩んでいる）ことがありましたら、思いつくままに書いてください。

対象が記入した連想イメージを重要と思われる順序に並べるよう教示した。次に、各順位のイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いかわかる7段階尺度で評定するよう教示した。評定結果に対し対象ごと個別にクラスター分析（Ward法；HALBAU for Windows Ver. 6.24 使用）を実施した。その後、クラスター分析の結果に対する対象自身の解釈を求めた。最後に連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は（+）、マイナスイメージの場合は（-）、どちらともいえない場合は（0）を記入するよう教示した。

第2部の口頭調査において、(1) 各クラスター及びクラスター全体の解釈、(2) 各イメージ項目に対してそのイメージを抱くようになったきっかけについて尋ねた。

第1部の調査と第2部の調査で得られた結果に対し、留学生が日本での生活面や人間関係面などにおいてどのような困難を抱えているか、またその困難点にはどのような構造が認められるかを検討した。結果の検討は、宮城（2011）、譚ら（2011）で示されている、(1) 心身の健康などの心理的側面、(2) 学習・研究、(3) 日本文化など社会文化的側面、(4) 対人関係領域、(5) 居住・経済領域を影響要因として採用した。加えて、(1) から (5) で説明できない要因は (6) その他、とした。PAC分析の結果得られた各対象のクラスターがそれぞれ (1) から (6) のいずれの影響要因に当てはまるかを検討した。異文化適応の影響要因の判定は、著者である石鍋と安が協議して行った。

### 3. 結果

クラスター分析の結果、各対象からデンドログラムが得られた。以下、対象Aから対象Eのデンドログラムを示す（図1から図5）。図1から図5のデンドログラムの縦軸は連想項目順位、横軸は連想項目間の距離を示している。各連想項目の内容、連想項目イメージ（+）（-）（0）、各クラスターの解釈がデンドログラム内に示されている。

デンドログラムの提示に続き、各クラスターについてインタビューを行った際の発話スクリプトを斜体字で示す。発話スクリプト内では、対象が特定される固有名詞などは削除した。なお、連想イメージおよびスクリプトの一部に文法的誤用が含まれるが、文意を損なわない限りそのまま記載した（以下同様）。

#### 3.1. 対象Aの結果

図1は、対象Aのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Aは10個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、2、3の3項目であった。クラスター2は、4、5、6の4項目であった。クラスター3は8、9、10の3項目であった。

以下の斜体で示した箇所は、図1を対象Aに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター1は、1. 人と人の距離が遠くように感じる（-）、2. 外国人を外国人としてみる人が多い（0）、3. 時間にこだわり過ぎ（0）、の3項目であった。イン

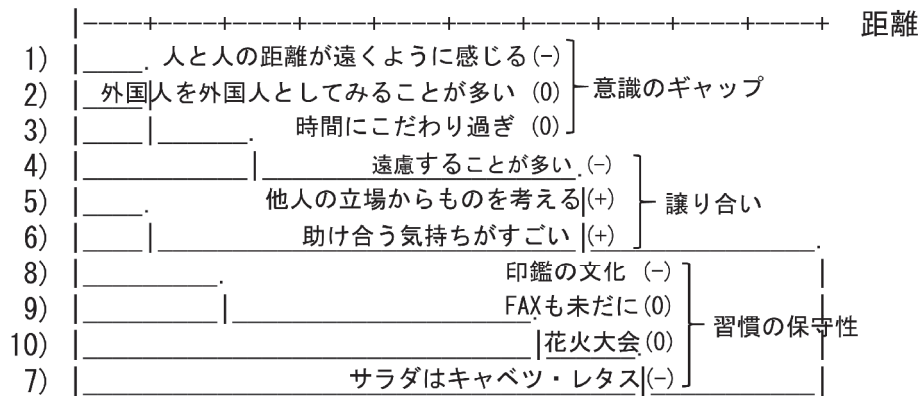


図1. 対象Aのデンドログラム

タビュール結果から、クラスター名を「意識のギャップ」とした。異文化適応影響要因は、(4) 対人関係領域と判定した。

そうですね。結構、違うところが多いのかなって思うし。特に2番の外国人を外国人として見る人が多いのは、特に私たち留学生から見ると、やっぱり日本のことをもっと知りたいという気持ちが多いので、別に外国人ではなくて、普通に日本が好きで日本に来ている人たちって、もっとポジティブに考えてくれたらいいのかな。

クラスター2は、4. 遠慮することが多い (-)、5. 他人の立場からものを考える (+)、6. 助け合う気持ちがすごい (+) の3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「譲り合い」とした。異文化適応影響要因は、(3) 日本文化など社会文化的側面と判定した。

あまりその災害に遭っていない人が、結構、自分でボランティアに行ったり、それを呼び掛けたりするのが、すごく印象的で・・・何ていうかな。普段の友達の間では、多分、距離を置いたりしてるけど、全然知らないとか、なんかマイナスな、結構、強いマイナスなときには助け合うっていう気持ちがあるの・・・。

クラスター3は、8. 印鑑の文化 (-)、9. FAXも未だに (0)、10. 花火大会 (0)、7. サラダはキャベツ・レタス (-) の4項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「習慣の保守性」とした。異文化適応影響要因は、(6) その他と判定した。

全体のイメージだと、なんか普段から使っているときとか見ているときとか場面が多いけど、特に、えーっと、8番。印鑑の文化だと、●●とか●●だと、そういうこと、こういうことは、今はほとんどない。・・・全体的に日本はなんか、店も100年続いている店とか、そういうのが結構、多いイメージがしてて。でも●●ではそんなに長い年で営業とかしている店のイメージが、みんなないです。

### 3.2. 対象Bの結果

図2は、対象Bのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Bは10個の連想イ



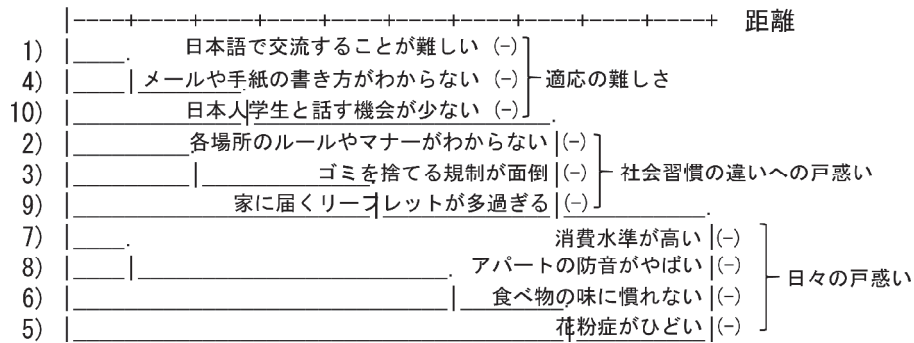


図 2. 対象 B のデンドログラム

メージを 3 つのクラスターに分類した。クラスター 1 は連想項目順位 1、4、10 の 3 項目であった。クラスター 2 は連想項目順位 2、3、9 の 3 項目であった。クラスター 3 連想項目順位は 7、8、6、5 の 4 項目であった。

以下の斜体で示した箇所は、図 2 を対象 B に提示しながらクラスター 1 についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター 1 は、1. 日本語で交流することが難しい (-)、4. メールや手紙の書き方がわからない (-)、10. 日本人学生と話す機会が少ない (-) の 3 項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「適応の難しさ」とした。異文化適応影響要因は、(6) その他と判定した。

えっと、えっと、これは、まあ、うん、えー、文化の差異だと思います。まず、言語も異なっ  
て、そして日本に来て、あの、日本人と話すことも少ないし、日本語もあんまりできない。上  
手にならないという感じ。日本語は漢字も使っているから、日本に来る前に、ああ、日本語あ  
まり難しいではないと思いますけど、でも実際に来て、ああ、やはり難しい。そして、日本に  
来てから周りの人も日本人だから、その、こういう、あの、状況で自分の日本語も上手になる  
はずだけど、でも、やはり周りの日本人の友達が少ないという。

クラスター 2 は、2. 各場所のルールやマナーがわからない (-)、3. ゴミを捨てる規制が面倒 (-)、  
9. 家に届くリーフレットが多過ぎる (-) の 3 項目であった。インタビュー結果から、クラスター名  
を「社会習慣の違いへの戸惑い」とした。異文化適応影響要因は、(3) 日本文化など社会文化的側  
面と判定した。

うん、まず、3 番と 9 番は自分でアパートを借りて、自分で 1 人暮らし。そして、ごみの分  
類がちょっとめんどくさいという感じで。そして、家に届く、その、リーフレットが毎日、も  
う結構、来ているのがして、ちょっと嫌な感じがする。2 番は、知らない所に行くときは、ちょっ  
と怖いですね、イメージ。(例えば、どんな所ですか。) 例えば、初めて日本に来てラーメン  
を・・・食べに行く。そうですね。まず、その店員さんは、麺はどのようにするか、  
そういう。・・・今でも、行ったことがない店も、あまり行かないです。・・・2 番は全然、思  
わなかった。

クラスター 3 は、7. 消費水準が高い (-)、8. アパートの防音がやばい (-)、6. 食べ物の味に慣れな

い(-)、5. 花粉症がひどい(-)の4項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「日々の戸惑い」とした。異文化適応影響要因は、(5) 居住・経済領域と判定した。

地理的、社会的差異だと思います。えっとー、まあ、消費水準は結構、●●の差がある。初めて日本に来たとき、あの一、飲み物は1本100円くらいは、●●と比べてちょっとびっくりしました。

### 3.3. 対象Cの結果

図3は、対象Cのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Cは11個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、3、4の3項目であった。クラスター2は連想項目順位9、2、6、10、11の5項目であった。クラスター3は5、8、7の3項目であった。

以下の斜体で示した箇所は図3を対象Cに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター1は、1. 将来の不確実性(+)、3. 不健康なライフスタイル(-)、4. 親の老後生活(+)の3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「将来への不安」とした。異文化適応影響要因は、(6) その他と判定した。

えーっと、1番を考えたきっかけは、まあ、卒業は延期するんですけど、でも結局4月の頃はITの会社に入ると、まあ、アルバイトとして実務経験を積むつもりだから、こういう人生で新しい段階で、こういう将来の不確実性についてちょっと心配します。3番では、ちょっと最近、最近ではない。なんかずっとこういう、まあ、夜は遅い時間までも寝てないし、朝は起きるのはちょっと、うーん、難しいの感じだから、自分の生活は不健康的。あと、まあ、やはり寮生のほうは今、えー、毎日ジムに通ったりとか、という……。えーっと、まあ、こういう考えはあると思います。特に4番のほう、まあ、親の老後の生活は、まあ、日本に……。

クラスター2は、9. 花粉症になった(-)、2. 人との距離感(-)、6. 友達との別れ(-)、10. 他人の目線が気になる(+)、11. 心配性である(-)の5項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「適応の難しさ」とした。異文化適応影響要因は、(4) 対人関係領域と判定した。

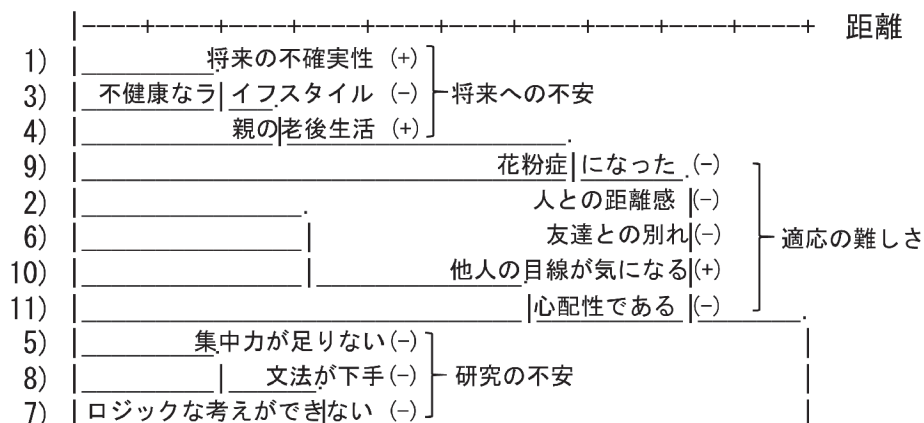


図3. 対象Cのデンドログラム

あと、人との距離感で、まあ、こういう人で、まあ、普通の日本人の学生でも、先生ともこういう、まあ、●●人と同じように親しくなれないの感じ。だから私のせいもあるし、向こうの、まあ、日本人はあまり人と付き合いのことは苦手なこともあると思うんですけど。こういうことは、まあ、解決できないと思いました。・・・と、付き合いとかちょっと分からないんです。はい。あと6番は、友達との別れは主に今は大学院生の友達なので、結構、まあ、日本に来た最初の日から知っている人も帰るので、やはり卒業、こういう時点で別れが多いなと思いました。あと10番で、まあ、他人の目線が気になるのは、まあ、やはり今の時期ってなんか特に、まあ、男性は女性に対する、こういうイメージを持ってる。私たまには人、言われる。全然、女らしくないとか。こういう感じがあるので、うーん、やはり人の目線は気にしないと、ますます自分らしくなるけど、でも今ちょっと人の目線、うーん、のほう、ちょっと、ちょっと気になりました。もし本当に私はこうすればいいから、もうちょっと変わろうと思っています。

クラスター3は、5. 集中力が足りない (-)、8. 文法が下手 (-)、7. ロジックな考えができない (-) の3項目であった。クラスター名を「研究の不安」とした。異文化適応影響要因は、(2) 学習・研究と判定した。

修士論文で完成できなかったということは、私、自分のせいなので。もし集中力があればもっと、まあ、6月以後はもっと力があれば卒業できるかもしれません。とか、こういう、まあ、考えがあるので。あと、文法はやはり下手。なんか最近は本当に一番、一番、基礎的な(筆者注：表記ママ。「規則な」か。)知識から勉強を始めました。あとは・・・。うーん、もう、例えば、まあ、最初の部分はアンケート調査とインタビュー調査、二つをやったので二つの部分を書くんですけど。やはり、まあ、一番重要なポイントは出していない。なんかインタビュー調査で、まあ、5人、五つのケーススタディーの中で一番重要なポイントを出した後、あと個人との、まあ、経歴とか書かないほうがいいと思いますけど。でも、まあ、12月の時点は、いっぱい書いたんです。やはり読む人の気持ちは考えてないので、先生・・・。

### 3.4. 対象Dの結果

図4は、対象Dのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Dは15個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、4、9の3項目であった。クラスター2は連想項目順位5、15、10、2、7の4項目であった。クラスター3は8、3、6、12、14、11、13の7項目であった。

以下の斜体で示した箇所は、図1を対象Dに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター1は、1.花粉症 (-)、4.地震が多い (-)、9.よく消防車・救急車を見て心配する (-) の3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「適応の難しさ」とした。異文化適応影響要因は、(5) 居住・経済領域と判定した。

うーん、寝ているの、携帯の地震警報を、の、声が大きく、大きくて、ちょっと寝ら。寝られない。9番は、よく寝る前に、あ、夜寝る前に、その声が聞こえ、ここ聞こえます。はい。自分も、の、1人暮らしで、もし、あの。

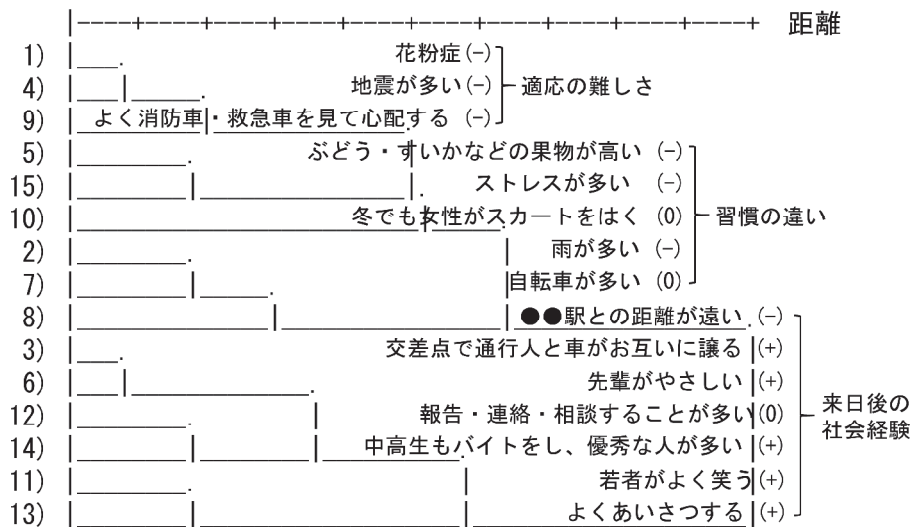


図4. 対象Dのデンドログラム

クラスター2は、5. ぶどう・すいかなどの果物が高い (-)、15. ストレスが多い (-)、10. 冬でも女性がスカートをはく (0)、2. 雨が多い (-)、7. 自転車が多い (0) の5項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「習慣の違い」とした。異文化適応影響要因は、(3) 日本文化など社会文化的側面と判定した。

はい。よく新聞から、新聞を読んで、あの、あー、会社員とか、みんな仕事、過労死、死亡がどんどん、あの。増えてく。

クラスター3は、8. ●●駅との距離が遠い (-)、3. 交差点で通行人と車がお互いに譲る (+)、6. 先輩がやさしい (+)、12. 報告・連絡・相談することが多い (0)、14. 中高生もバイトをし、優秀な人が多い (+)、11. 若者がよく笑う (+)、13. よくあいさつする (+) の7項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「来日後の社会経験」とした。異文化適応影響要因は、(6) その他と判定した。

これは、あー、バイトしてから、そのバイト先の人と話して。はい。8番は私、住んでるところはちょっと●●駅とちょっと遠い。買い物したいときもバスで30、15分ぐらいかかります。3番は、その、交通信号がない、の小さいな十字路で、あの、車も私も、あの、先、相手をゆずして、でも、相手も私を待ってて、結構、時間がかかります。13番は、これは、あの、知らない人間にも、あの、朝を出会って、おはようございますも、うーん、仕事もはじ、そのバイト先に入って、あ、店に入ってから、あの、すぐ、あいさつして、それは人間とのちょっと、した、親しく、あの、関係が近くになって、これはいいところだと思います。

### 3.5. 対象Eの結果

図5は、対象Eのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Eは11個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、6、4の3項目であった。クラスター2は連想項目順位5、7、2、9、3の5項目であった。クラスター3は8、10、11の3



項目であった。

以下の斜体で示した箇所は図5を対象Eに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター1は、1. 言葉の壁を越える (+)、6. 敬語を使う (-)、4. 就活の流れが複雑です (-) の3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「日本語の困難さ」とした。異文化適応影響要因は、(6) その他と判定した。

うーん、例えば、就活やあるいは論文を書くときに、やっぱり一番の、外国人として、一番の難しいところは言葉の使いとか。ビジネス上はもうちょっと敬語、例えば電話のマナーとかメールのマナーとか、まあ、全部、敬語が含まれている。時々なんかちょっと言葉のあつか、扱いが注意しなきゃということがありまして。いや、就活に通して、なんか、今は結構、変わるんですけど、なんかちょっと日本人のなんか考え方、ちょっと日本人より、近くで、最初は、●●大の中にすごく外国人の●●人の留学生がなんかグループして、毎日、●●語で話すとかなんか、全くなんか、なんか、その日本語の能力を全く伸びね、ていないから、そういう点が意識した、意識した、また、自分のもうちょっと日本人なりの日本語をしゃべれなきゃ、その就職活動をちゃんとうまくいくみたいのことを意識した。

クラスター2は、5. 積極的にちゃんと自分の意見を相手に伝える (+)、7. グループディスカッションが笑顔で相手の意見を聞く (-)、2. 自己分析や業界分析や面接などのことで苦労している (-)、9) 就活が大変だけど色々なことが経験できる (+)、3. 就活はお金がかかる (-) の5項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「就職活動で直面している問題」とした。異文化適応影響要因は、(6) その他と判定した。

えっと、例えば5番の場合は、その就活のときに、その、グループディスカッションが多いので、たとえば、なんか、たくさんのインターンシップも私が参加した、しましたが、その、外国人として、その、もうちょっと、なんか、日本人の、なんか、その、国民性があって、その、最初で、なんか、手を挙げる人はあんまりないから、だから外国人として、もうちょっと主導的に、なんか自分の意見を向こうに伝えることが重要だと思いました。はい、そうですね。なんか●●の場合は、その企業の、その、例えば財務表とか、いろんな、その、その、うー、有価報告表みたいの、外に見えない場合がたくさんあるので、日本の場合は、その上場する企業が全部ネットで見えるから、だから、そのいっぱい情報を集めて比較できるから。だから、業界分析もできるし、また自分の感想、意見、なんか、発見がいろいろの意見を書けるし。

クラスター3は、8. 体調管理が大事です (-)、10. 花粉症が困る (-)、11. 春にさくらがきれい (+) の3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「日々の感情」とした。異文化適応影響要因は、(1) 心身の健康などの心理的側面と判定した。

主にマインド管理のテーマを設定しました。まずは、8番の場合は主にその精神的の面を、すと、いろんな会社の説明会とか、その、インターンシップに参加して、まあ、意見を、の、と、なんかちょっと意見と違う人もいるし、また、なんか、その、どうやって、なんか緩めて自分の意見を、向こうに説得するのか、あるいは、その、なんかもうそんなにストレート、な

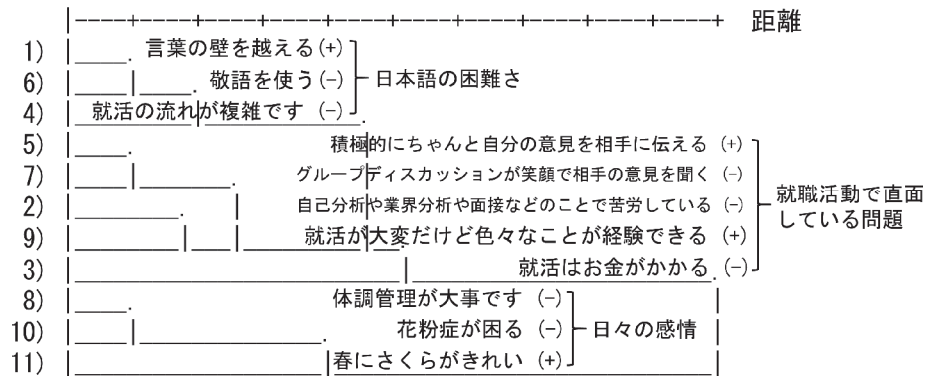


図 5. 対象 E のデンドログラム

んか、その、やっぱり国民性が感じで、日本の場合は、ちょ、もうちょっと、なんか、あいめ  
て、なんか、その、なんというか。はい、ま、言えない場合も結構ありますので、やっぱりな  
んか、その、空気を読むという日本のスペシャルの言葉で、まあ、深く感じまして。

#### 4. 考察

表 1 は、対象 A から E のクラスターの一覧である。カッコ内は筆者らが判定した異文化適応影響要因である。対象 A の 1 つめ（意識のギャップ）と 2 つめ（譲り合い）のクラスター、対象 B の 2 つめ（社会習慣への戸惑い）と 3 つめ（日々の戸惑い）のクラスター、対象 C の 2 つめのクラスター（適応の難しさ）と 3 つめのクラスター（研究の不安）、対象 D の 1 つめ（適応の難しさ）と 2 つめ（習慣の違い）のクラスター、対象 E の 3 つめのクラスター（日々の感情）において、先行研究（宮城 2011、譚ら 2011）で示された (1) から (5) の異文化適応の影響要因を示唆するクラスターの形成が確認された。異文化適応の研究は、留学生にどういった変化が予想され、どう対処するかを考察することが重要視される（宮城 2011）。個々の留学生が抱える困難点をクラスター構造として可視化することにより、留学生とサポート側の教員双方がより具体的な問題に気づくことが可能になると考えられる。PAC 分析では、対象自身に構造分析に関与させ、自身の問題について気づきをもたらすことが可能であることも示されている（内藤 1997）。また、井上（1998）では、カウンセリングにおける PAC 分析の応用可能性として、信頼関係形成と対話の道具としての機能や自己理解を深める道具としての機能などが示されている。留学生の異文化適応過程の気づきの道具としても応用が可能であると考えられる。

表 1. 対象 A から対象 E のクラスターの一覧

対象	クラスター 1	クラスター 2	クラスター 3
対象 A	意識のギャップ (4)	譲り合い (3)	慣習の保守性 (6)
対象 B	適応の難しさ (6)	社会習慣の違いへの戸惑い (3)	日々の戸惑い (5)
対象 C	将来への不安 (6)	適応の難しさ (4)	研究の不安 (2)
対象 D	適応の難しさ (5)	習慣の違い (3)	来日後の社会経験 (6)
対象 E	日本語の難しさ (6)	就活で直面している問題 (6)	日々の感情 (1)

カッコ内は筆者が判定した影響要因を示す。異文化適応影響要因の指標は、(1) 心身の健康などの心理的側面、(2) 学習・研究、(3) 日本文化など社会文化的側面、(4) 対人関係領域、(5) 居住・経済領域（宮城 2011、譚ら 2011）および、(6) その他とした。先行研究で説明できない (6) と判定されたクラスターをアンダーラインつきゴシックで示した。

表1に示したように、異文化適応の影響要因がクラスター構造として認められた一方、(6) その他と判定されたクラスターが6件と最も多かった。譚ら(2011)のレビュー論文では、異文化適応を測定した研究は多岐に渡ることが示されている。本研究の結果においても、適用した5つの影響要因以外と判定される事例が5名の対象から全て確認された。異文化適応に与える要因が多様であることを示唆していると考えられる。個々の留学生が抱える異文化適応に関する問題に対し、我々教員が個別に対処する際の資料として、本研究のPAC分析が果たす役割があると考えられる。

これまでの外国人を対象にした対日観の研究では、滞在歴が長い外国人は肯定的な対日観を有しているのに対し、滞在歴が短い外国人は肯定イメージと否定イメージが複雑に絡んでいることなどが示されている(安2009、安2010a、安2010b、安2011、安・池田2012、安2012)。生活面や人間関係の困難点に焦点を絞った本研究の結果は、滞在歴が結果に影響を与えた可能性も考えられる。もう一つの可能な解釈として、各対象においてなんらかの葛藤の時期にあることを示唆しているとも考えられる。以下に示した「(6) その他」と判定した各クラスターにおけるイメージ項目の傾向が見出しにくいことから、生活面や人間関係の困難点についての整理がまだ不十分であると考えられる。

- 対象A 「(6) その他」のイメージ項目：「印鑑の文化」「FAXも未だに」「花火大会」「サラダはキャベツ・レタス」
- 対象B 「(6) その他」のイメージ項目：「日本語で交流することが難しい」「メールや手紙の書き方がわからない」「日本人と話す機会が少ない」
- 対象C 「(6) その他」のイメージ項目：「将来の不確実性」「不健康なライフスタイル」「親の老後生活」
- 対象D 「(6) その他」のイメージ項目：「交差点で通行人と車がお互いに譲る」「先輩がやさしい」「報告・連絡・相談することが多い」「中高生もバイトをし、優秀な人が多い」「若者がよく笑う」「よくあいさつする」
- 対象E 「(6) その他」のイメージ項目：「言葉の壁を超える」「敬語を使う」「就活の流れが複雑です」「積極的にちゃんと自分の意見を相手に伝える」「グループディスカッションが笑顔で相手の意見を聞く」「自己分析や業界分析などのことで苦労している」「就活が大変だけどいろいろなことが経験できる」「就活はお金がかかる」

在日留学生の異文化適応についてのレビュー論文では、ホストとの接触が多いほど広義の適応に有利であることが示されている(田中1998)。本研究の対象AからEにおいても、日本人との交流が深まることにより、生活面や人間関係の困難点についての整理が進む可能性もあると考えられる。

本研究で用いたPAC分析は、対象の態度構造を可視化し問題点に焦点を当てることが可能であるが、調査時点の対象の態度構造の反映に留まる。本研究の限界を見据え、今後は経時的な調査や定量的な調査も並行して実施していく必要があると考えられる。

## 5. 結論

本研究では、在日留学生の異文化適応に着目し、先行研究によって示された異文化適応の影響要因指標がどのような構造を持って現れるか、対象ごとに形成されたクラスターを中心に検討した。

影響は (1) 心身の健康などの心理的側面、(2) 学習・研究、(3) 日本文化など社会文化的側面、(4) 対人関係領域、(5) 居住・経済領域 (宮城 2011、譚ら 2011) および、(6) その他とした。結果、以下の示唆が得られた。

1. 先行研究 (宮城 2011、譚ら 2011) で示された (1) から (5) の異文化適応の影響要因を示唆するクラスターの形成が確認された。

個々の留学生の異文化適応に関する問題をデンドログラムとして可視的に提示することより、留学生に対しての明示的なサポートの一資料として使用が可能であると考えられる。

2. 個々の留学生が抱える異文化適応に関する問題に対し、定量的な調査ではカバーしきれない個別の問題を可視化できることが示唆された。

本研究の手法を用いることにより、先行研究で行われてきた定量的な調査をではカバーしきれない個々の留学生の問題を浮き彫りにすることが可能であると考えられた。同様に、デンドログラムとして可視的に構造を示すことにより、自己が抱える問題の気づきを促すことにつながると考えられる。

本研究を通して、在日留学生の異文化適応の質的な構造の一端が明らかになった。留学生の異文化適応に関する研究は定量的な検討が中心であったが、個別の事例から、より細かいケアの必要性が示唆された。今後、多様化することが予想される留学生を支援していくための資料となりうると考えられる。また、コロナウィルス感染拡大に伴い、留学生の孤立とそれに対する支援にも社会的な焦点が当たりつつあるが、困難を抱える留学生の支援の検討をさらに進めていく必要がある。

## 謝辞

本研究は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究 C (課題番号: 17K02838、研究代表者: 安龍洙) の助成を受けた。

## 引用文献

- 安龍洙 (2009) 「外国人の対日観に関する研究－韓国人短期留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』7, 1-13.
- 安龍洙 (2010a) 「外国人の対日観に関する研究－中国人短期留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』8, 1-17.
- 安龍洙 (2010b) 「外国人の対日観に関する研究: 日本滞在歴の長い韓国人の場合」『ユーラシア研究』7(4), 373-392.
- 安龍洙 (2011) 「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』9, 1-18.
- 安龍洙・池田庸子 (2012) 「日本人の外国・外国人観に関する研究－茨城県在住の主婦の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』10, 15-28.
- 安龍洙 (2012) 「外国人の対日観に関する研究－中国の少数民族出身者の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』10, 1-14.
- 安龍洙 (2015) 「日本留学経験者の韓国帰国後の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』13, 1-14.
- 安龍洙 (2016) 「日本で就職した元韓国人留学生の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』15, 93-105.
- 江村裕文 (1993) 「留学生の異文化適応」『法政大学教養部紀要』85, 1-11.
- 田中共子 (1992) 「在日留学生の対人行動上の困難－異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討－」『社会心理学研究』7(2), 92-101.
- 田中共子 (1998) 「在日留学生の異文化適応: ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から」『教育心理学

- 年報』第37集, 143-152.
- 田中共子 (2010) 「異文化適応とソーシャルスキル」『日本語教育』146, 61-75.
- 譚紅艷・渡邊勉・今野裕之 (2011) 「在日留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望」『目白大学心理学研究』第7号, 95-114.
- 内藤哲雄 (1997) 「PAC 分析の適用範囲と実施法」『人文科学論集』31, 51-88.
- 平田譲二 (2014) 「既存研究からみた異文化適応能力」『産業能率大学紀要』34 (2), 39-55.
- 宮城徹 (2011) 「国費学部留学生の動機付け、異文化適応、成績等の関連について (1): 管見先行研究についてのレビュー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』37, 29-45.
- 兪幃蘭 (2016) 「対人葛藤に関する研究動向と課題」『東北大学大学院教育学研究科年報』第64集 第2号, 105-120.
- Pondy, L. R. (1967) Organizational Conflict: Concepts and Models, *Administrative Science Quarterly*, Vol. 12, No. 2. 296-320.